

2019/11/4 横浜歴史研究会例会

はじめに

演者は退職後、京都にワン・ルームを借り、月に平均10日ほど滞在し、主に京都市内を徘徊、名所旧跡・祭・行事などの見聞記を『京日記』というタイトルで SNS に公開している。

江戸時代中期の京都人「神沢杜口」も、京都東町奉行所与力を退職後、ひとり貸家住まいして、終生、京都市中を徘徊しつつ、見聞したり考察したことを『翁草』というタイトルの随筆集としてまとめている。

このように、演者も杜口と似た性向があるところから非常に親近感を感じ、杜口とその主著翁草を調べ始めたところ、特に翁草の研究があまり進んでいないことを実感した。

翁草は、一般的には随筆として分類されているが、実態は他書の一部をそのまま写した部分が多い。しかし、杜口の関心の赴くままに、歴史・地理・文学・芸能・有職故実・芸術・工芸・宗教・京都の事件や風俗、等々、百般に渡る直接・間接の見聞も少なからず記録していて、江戸時代を理解する上で有益な史料となっている。

(一) 本阿弥の話

翁草は全200巻(約1300タイトル)の大著である(①)。その中の巻百十七に、杜口はタイトル「本阿弥の話」という短い聞き書きを記している。以下はその全文である。

+-----+

- 本阿弥の話 -

明智光秀を信長公へ吹挙せしは本阿弥光正なり、後年、神祖、光正へ仰けるは、人を肝煎吹挙する事、卒爾にはせぬがよし、光秀が如き者すら凶らざる弑逆有り、況や常並の者いかなる事をか仕出すらん、汝等は諸家へ廣く立入る者なれば、一人共心得をすべしと御教誨有り、光正慎みて奉之、夫より本阿弥の家格として何方へも人を肝煎事なし、今も浪人の類、様々頼め共、右の由を以て断を申と、今の本阿弥十郎左衛門語りき

+-----+

以下、上記をやや意識的に現代語訳してみる。

+-----+

- 本阿弥の話 -

明智光秀を織田信長に推挙したのは本阿弥光正である。

後年「本能寺の変」の後、神君(徳川家康)は本阿弥光正に対し「人を推薦したりすることは、簡単に行わないほうが良い。光秀ほどの人物でもあのような謀反を起こすのだから、まして普通の人は何を仕出かすか判らない」。

「本阿弥家は、いろいろな家に入出入りすることが多いのだから、よくよく気を付けなければいけない」と教諭したところ、本阿弥光正は慎んで聞いておりました。

それ以後、本阿弥家では、就職の口利き・世話などはしないことにしました。

今も浪人らしい者達が、いろいろ頼んで来るが、以上の事情があるのでお断りしていると、今の「加賀本阿弥」の当主「本阿弥十郎左衛門」は語った。(演者 訳)

+-----+

ここで注目すべきは「本阿弥光正という人物が、織田信長に明智光秀を召し抱えたらどうかと働きかけた」という記述である。

光秀が、近縁関係にあった信長正室（斎藤道三の娘「帰蝶・濃姫」）の口利きで信長に仕えるようになったという巷説は有名だが、上記の逸話は、ほぼ全く知られていない。

周知の如く明智光秀は本能寺の変を引き起こした張本人であるので、光秀と交流があった同時代の人物の多くは後難を恐れ、自身が所有する光秀と関係した記録（書簡・日記など）のほとんどを廃棄・隠蔽・改竄してしまっている。

そのため、光秀が信長政権下で活躍する以前の今に伝わる記録はたいへん少ない。「突如として（永禄12年以後）信長に重用され始めた経緯」についても諸説がある。その観点から見ると、この聞き書きはたいへん貴重だと考えられる。

## （二）本阿弥光正・本阿弥十郎左衛門とは

この本阿弥の話に登場する本阿弥光正、並びに本阿弥十郎左衛門とは、どのような人物なのだろう。

本阿弥という姓の家は、「ほんなみ」と読み、元々は刀剣のとき（研磨）・ぬぐい（浄拭）・めきき（目利・鑑定）などを家職として足利尊氏に従い、代々、足利将軍家～織田信長～豊臣秀吉～徳川将軍家に仕え、室町・戦国・江戸時代を通じて名家であった。戦国末期には、書・陶芸・漆芸・出版・茶の湯など芸術方面にも進出した本阿弥光悦が有名である。分家が多く、加賀前田家、尾張徳川家などにも一族が仕えていた。

本阿弥一族の家系図には、本阿弥光春『本阿弥次郎左衛門家伝』（『改定史籍集覧』別記類五所収）、日慈『本阿弥家系草稿』（天保2年〔1831年〕）、本阿弥長識『空中斎草抄』（明善館、1884年）所収『本阿弥十二家系譜』などがあり、これらを校合して再構成した系図を参照してみると、本阿弥十郎左衛門というのは「加賀本阿弥」と呼ばれる分家の四代当主「本阿弥十郎左衛門光蘇(こうそ)」であることが判った。系図上で、十郎左衛門を名乗っているのは、この光蘇だけであった。

光蘇は、刀剣の鑑定家として加賀藩に150石で仕えており、享和3年（1803年）10月21日に61歳で亡くなっている。

翁草を書いた神沢杜口は、寛政7年（1795年）2月11日に86歳で亡くなっているのので、二人は同時代人と言える。互いに面識があったか（さらに交流があったか）どうかの記録は発見されていないが、杜口も代々、200石取りの京都東町奉行所与力で、両者は身分的にもそれほど差がなく、また当時、京都には本阿弥屋敷もあったことから、その可能性がなかったとは言えない。

もし、本阿弥の話が杜口が光蘇から直接聞いたのではないとすると、当然、人伝てに聞いたということになるが、そのこと自体はあまり問題ではないと考える（たとえ又聞きであっても、内容の正誤とは別）。

次に、本阿弥光正であるが、この人物は上記の系図上では確認できなかった。光正を名乗る本阿弥家の人物は存在しないと考えられる。

けれども、本阿弥家歴代の人物を見ていくと、光正と極めてよく似た人物が存在する。

その人物は絶対条件として、本阿弥の話に出てくる徳川家康、織田信長、明智光秀と同時代人で、この3人とかなり親しい関係にある本阿弥家の者でなければならない。

この条件に極めて近いのは、本阿弥宗家七代当主「本阿弥三郎兵衛光心」の婿養子で、一時、光心の後を継いだ「本阿弥次郎左衛門光二」ただ一人である。大永2年（1522年）生まれ、慶長8年（1603年）12月27日、80歳で没した。著名な本阿弥次郎三郎光悦の実父でもある。

光二は、応仁の乱の当時、京極家出身で2度に渡って室町幕府侍所所司代を務め、名所

司代と言われた多賀高忠の孫と伝えられており、七代当主光心の娘「妙秀」を妻とし、本阿弥宗家に婿養子として入った。

光二は、一時、養父光心の後を継いだが、その後、光心に実子（後の八代当主「本阿弥三郎兵衛光刹（こうさつ）」）が生まれたので別家を起こし、後に「光二系」と称される分家の初代となった。

光悦の従兄弟の子で、本阿弥「光二系」四代当主「光甫(こうほ)」は、本阿弥家の家記である『本阿弥行状記』を編集している(②)。そこに光二に関する記事や逸話がいくつか記されているので、それらを下記に時系列で列挙する（「－」は、演者が適宜挿入した関連事跡）

本阿弥行状記記載	年代	光二の満年齢	事跡
－	天文 18 年 (1549 年)	27 歳	松平竹千代(後の徳川家康)、数え 8 歳の時、今川家の人質となる。
五十一段	天文 18 年～天文 24 年 (1549 年～1555 年)	27 歳～33 歳	光二は、駿河の「今川義元」方に長期滞在（あるいは仕官）し、今川家の人質となっていた松平竹千代とも昵懇になり、義元が竹千代に脇差を作ってやる際に、光二が木型を造り、それを島田鍛冶国房に渡し二振り作らせた。出来の良いほうに光二に命じて拵えを作らせ竹千代に与え、もう一振りは光二が拝領したという。これは 5 代後の光伝まで代々差料としたという。 松平竹千代は、駿河時代、光二が刀細工をするのをいつも見ている、光二は家康に小刀など研いであげたり、一緒に食事を共に(相伴)したりしていた。
－	天文 24 年 (1555 年)3 月	33 歳	数え 14 歳になった松平竹千代は元服し、主君の今川義元から「元」の一字をもらい受けて松平次郎三郎元信と名乗った。また、義元からは大小刀を与えられている。
－	永禄 2 年 (1559 年)2 月 2 日	37 歳	養父の本阿弥家七代当主「三郎兵衛光心」が 64 歳で没する。
－	永禄 3 年 (1560 年)	38 歳	「桶狭間の戦い」で今川義元が討ち死にする。
一段			光二は、信長が特に親しくしていた者で、御前に毎日参上していたという(③)。
一段	天正 7～8 年頃 (1579 年～1580 年)	57 歳～58 歳	荒木村重の謀反が終息した頃、光二が、信長の近侍の(刀剣に関する)中傷により、信長の勘気をこうむって命も危うくなった時、妻の妙秀は鹿狩に出かける信長を追い、馬上の信長に取りすがって夫の冤罪を直訴した。信長は「うるさい女よ！」と鎧で蹴ったりしたのだが、必死に訴える妻の様子を見て、「身近に居る妻がこれほど訴えるなら無実であろう」と、ようやく勘気を解いた。
－	天正 9 年 (1581 年)9 月 8 日	59 歳	本阿弥家八代当主「三郎兵衛光刹」が没する。
十二段	天正年間 (1573～92 年)	51 歳～70 歳	光二は、まだ越前府中領主であった小身の頃の信長家臣「前田利家」とも交流があり、利家が出世した天正年間には、知行をもらうようになった(④)。

—	慶長8年(1603年) 12月27日	80歳	光二、没する
五十一段	慶長8年(1603年) 以降(光二、死後 か)		家康が本阿弥一族を駿河に呼び寄せ、全員に面会したが、その折、光二の血筋の者を尋ねたところ、松平正綱が「この光瑳という者が光二の孫です」と紹介した。家康は顔をご覧になって「光二によく似ている」と言った。 後年、家康は光二の長男光悦にも目をかけていた。

以上の記載から、神沢杜口が記している光正とは、光二の誤りではないかと考えた。

現在、翁草は活字化されているが、最初から杜口自身が誤記したのか、杜口の原本から写本作成のため書写する際に誤記したのか、写本から活字本を作成する際に誤植したのか、調査中であるが、いずれにしろ「光正」は間違いだと考えられる(⑤)。この推論を補強する有力な材料として「巻三十八、鬼丸の太刀の事」においても「本阿弥光徳」を「本阿弥光成」と誤記していることを挙げたい(⑥)。

このように翁草は諸理由により、話の大筋は正しいのだが、細部において誤記が散見される(⑦)。

### (三) 本阿弥光二と明智光秀の接点・交流

以上、『本阿弥行状記』から、光二と信長・家康との関わりは、かなり深いことが考察できるが、光二と光秀の関係については、現在、調査中である。光二と光秀の接触・交流の記録は、管見の限りでは見つかっていない。

光二と光秀の接点、及び交流状況を解明していくことができれば、光秀と信長の関係性、ひいては「本能寺の変」についても新たな視点が浮かび上がってくる可能性もあるのではないかと考えている。

現在、両者の直接的な接触・交流を記した史料は発見されていないが、ただ、それが想定されうるいくつかの状況は考えられる。

その有力なものの一つは、室町幕府13代将軍「足利義輝」が、大の「刀剣、及び剣術愛好家(マニア)」であったことから起因する推理である。

義輝は剣術をよくし、塚原ト伝から「一ノ太刀」の伝授を受けたと伝わっており「劍豪将軍」とまで渾名(あだな)されていた。また「天下五剣(⑧)」をはじめとする、名高い業物を宝具として複数所有した刀剣蒐集家でもあった。

そして本阿弥家は、室町幕府の刀剣御用を勤めている。

永禄2年(1559年)に本阿弥家七代当主「光心」が64歳で没したあと、実質的に一時、光二が長老として本阿弥家を率いていたと考えられるから、義輝が永禄8年(1565年)5月、「永禄の変」で惨殺されるまで、光二は頻繁に、刀剣好きな義輝のもとに伺候していた可能性は大きいと思われる。

そしてこの当時、光秀は義輝重臣「細川藤孝(幽斎)」の家臣であったという数点の史料が存在する。その場合、藤孝を通じて光二の知遇を得ていた可能性が考えられる(⑨)。

また光二は、刀剣の鑑定等で戦国諸大名の招きを受けている(⑩)。

光秀は若年より、越前の戦国大名「朝倉義景」に仕官、あるいは朝倉氏領国内に十年間居住していたという説もあるので、光二が朝倉氏にも招聘されていたとすると、そこで知遇を得たという可能性も考えられる(⑪)。

さらに、光秀には筆頭家老で光秀の右腕とまで言われていた「斎藤利三」という人物がいる。あの「春日局」の実父で、「本能寺の変の主導的な役割を担ったのは利三」との説も存在しているくらい、光秀に食い込んでいる人物である。

利三は、15世紀半ばから美濃国守護代を務める美濃斎藤氏の一族で、美濃土岐一族の光秀と同様に室町幕府の「奉公衆」の出身、利三自身は37歳の時、光秀の家臣となったが、家系的には明智家と濃い縁戚関係にある(⑫)。

実は、その利三の祖父や曾祖父は(さらに言えば家系的に)、刀剣のいわば研究家で、刀剣の研究書(刀剣書)を残している(⑬)。

曾祖父「斎藤利安(戒名は敬仲元肅)永正5年(1508年)没」は、父の美濃守護代「斎藤利永」より伝わる「築氏正長銘尽写(古今鍛冶銘)」という刀剣書を所持しており、その最後の頁には「天文十四年(1545年)卯月五日本阿弥花押」と記されている。天文14年当時の本阿弥家の当主は光二の父「光心」と考えられる(⑭)。

祖父「斎藤利匡(戒名は桂岳宗昌)」は、永正13年(1516年)、曾祖父「利安」が集めた莖(なかご)の押形を5年を費やして「往昔集」としてまとめた。栗田口、相州、中国四国、北陸、備前備中、九州まで約840口ほどの刀剣を網羅する名著である。原本は失われているが抄本が残る。それが「往昔抄」で、演者も京都国立博物館で観たことがある。

美濃の重鎮らが以上のような有様なので、当時の美濃では刀剣の「目利稽古」も盛んに行われていた。そしてこのような席に、本阿弥光二、並び父「光心」も、度々、呼ばれていた可能性は大きいと考える。

上記の天文14年(1545年)、光二は23才だったので、通説では、弘治2年(1556年)まで東美濃「明智城」に在城していたとされる6歳下の光秀を見知っていたかもしれない(⑮)。

つまり、光二と光秀は、若年の頃から壮年に至るまで接触の機会は多かったと、言えるのではないだろうか。

以上、可能性の話が多く恐縮だが「明智光秀を本阿弥光二及び刀剣との関係」で考察する観点は、今まで無かったと思われる。とにかくこれからであり、光二と光秀の接触・交流を示す史料の発見等、さらなる研究が進むことを願っている(⑯)。

## 明智光秀を織田信長に推挙した人物 【注】

① 1 タイトル中に、数話の相互に関連のない話を書き込んでいる場合もあるので、話の総数としては2000以上あると推定できるが、正確に分類した研究は見つからない。本稿では下記⑤を4冊にまとめた『歴史図書社 昭和45年11月30日発行 翁草』を参照している。

② 本稿では『平凡社 2011年7月11日出版 東洋文庫810 本阿弥行状記』を参照。

③ 『伝本阿弥光二押形集』には、信長が所有、あるいは信長に献上された刀剣が多数収録されている。

④ その知行が光山（光二から4代目の光甫の五男）に引き継がれ、光山の系統は「加賀本阿弥」と称された。翁草の「本阿弥の話」をした本阿弥十郎左衛門光蘇は、光山の孫に当たる。

⑤ 明治38年、池邊義象が『藤井五車楼本』『富岡鉄斎所蔵本』『京都府立図書館本』を合わせて校訂し、翌年、活字印刷された。

⑥ 「鬼丸の太刀（鬼丸国綱）」は天下五剣の一つであるだけに、詳細な履歴が判明している。鎌倉時代、北条家が栗田口国綱に打たせ重宝とし、その後、新田義貞、斯波高経の手を経て足利将軍家に伝わる。13代足利義輝が二条御所での死闘（永禄の変）の際に振るったという。15代足利義昭から織田信長に贈られ、更に豊臣秀吉に渡るが、秀吉は鬼門よけの意味を込めて、本阿弥家9代当主本阿弥光徳に預けた。後に光徳は家康に献上したが、やはり家康も「太閤深き考ありて其方へ預たる太刀なれば、其儘預るべし」と本阿弥家に戻した。宝永3年（1626年）11月13日、後水尾院に嫁いだ徳川和子に皇太子高仁親王が御誕生の節、翌月4日鬼丸が御所に献上された。しかし宝永5年（1628年）6月11日に皇太子が崩御（急死）したため、「不吉な太刀である」とのことで再び本阿弥家に戻されたという。享保3年（1718年）9月4日、8代将軍吉宗が大久保佐渡守を通じ、京都の本阿弥家に命じて江戸城で一覧する。慶応3年（1867年）10月に15代将軍慶喜が大政奉還すると、朝廷の御物になった。明治天皇に献上され「皇室御物」として現在に至っている。

⑦ 「諸理由」とは、翁草は他書からの転写以外「聞き書き」であること、そして全200巻のうち、後編草稿100巻のかなりの部分を京都の「天明の大火」で焼失してしまい、杜口が「記憶をたよりに、再度書き直した」、などにより、話の大よそは正しいが、細部に誤りが散見される。また『歴史図書社 昭和45年11月30日発行 翁草』解説では、活字化するに当たって「巻五十八、江戸城雨溜桶の事」の「椎名（しいな）」を「推名」としたような「誤植が他にないとはいえない」と記しており、この件もそうである可能性が高いと考える。

⑧ 鬼丸国綱、三日月宗近、童子切安綱、大典太光世、数珠丸恒次の五口の名刀のこと。天下五剣については、出典は不明だが室町時代、既に使われており、その後、口伝えに広まった言葉。江戸時代に本阿弥光遜、明治時代に本阿弥日洲が用いた記録があるとのこと。

⑨ 興福寺多聞院主英俊著「多聞院日記」、ルイス・フロイス著「日本史」、江村専斎著「老人雑話」、松浦鎮信著「武功雑記」などに、「光秀は藤孝の（下級）家臣であった」と書か

れている。

黒嶋敏「足利義昭の政権構想『光源院殿御代当参衆并足輕以下覚書』を読む」によれば、永禄10年（1567年）2月から翌年5月までに作成された可能性が高い「光源院殿御代当参衆并足輕以下覚書（永禄六年諸役人附）の後半部」に、初めて「明智」の名前が載ったことから、永禄8年当時、光秀はまだ幕臣ではなかったと考えられる。永禄の変後、細川藤孝家臣から、幕臣に取り立てられたと考えられる。

最近注目を浴びている明智憲三郎氏の著書「本能寺の変431年目の真実（文芸社文庫）」では、永禄12年（1569年）1月5日の「本圀寺攻防戦」で武功を挙げ、それ以後、幕府内でも重きをなすようになったと、主張している。

⑩『本阿弥行状記』五十一段に「光二は、刀脇差の目利きと細工において並ぶ者のない名人であったため、諸大名がそれぞれの国元に呼び寄せ、国中の刀脇差を見せた」との記述がある。

⑪『遊行三十一祖 京畿御修行記』に、光秀は「越前朝倉義景を頼り、長崎称念寺門前に十年居住していた」、また、天正元年八月二十二日附「服部七兵衛尉、宛光秀書状」は、かつて光秀が越前に住んでいたことを示している。しかし、『米田家文書』には永禄8年中頃、光秀が浅井家の侵攻を受けていたと考えられる近江の田中城で籠城していたと書かれていることから、光秀が朝倉家に仕えていたとする説に疑問も出ている。

有名な『朝倉敏景十七ヶ条』を制定した、朝倉氏7代当主「朝倉敏景」は、その中で「名刀を好むな」と戒めているが、斎藤利国（後述）の娘が母親である10代当主「朝倉孝景」は、「朝倉長光、その他」の名刀を所持していた（家訓は有名無実化していたとも言える）。

⑫光秀の叔父「光安」の妻は、利三の実父「利賢」の姉妹（利三の叔母）。また『徳川実記』には、光秀の姉妹は利賢の妻（利三の実母）。また『美濃国諸家系譜』では、光秀の祖父の娘は利賢の妻（光秀の叔母）とある。別紙「美濃国守護代家 斎藤氏 系図」を参照。

⑬美濃斎藤家の系図は錯綜しており、利匡は利三の叔父・利安は利三の祖父など、諸説あり。

⑭この本阿弥の花押は、偽との説もある。

⑮光秀は、通説では土岐頼清の次男「明智頼兼」の8代後裔、明智城主「明智光継」の嫡子ということになっているが、少なくとも土岐一族であり、元服するまでは美濃国に居住していたことは確実にみられている。

⑯『若州観跡録』には「光秀は若狭国小浜の刀鍛冶・藤原冬広の次男」という記述があるが、これについても、改めて考え直してみる余地があると考えられる。